

いの流水俳壇

間 浩太選

「当季雑詠」

句の反古を拾い読みたる焚火かな

井上 郁子

(評)俳句の上達方法として、作り続けること、多く作って、捨てること。きっちり推敲すること、とよく言われますが、この作者は、多く作句され、推敲されていることがわかります。句歴はあまり長くないのですが、進歩の早いのは当然と、思います。わかり易い良い句です。

添書きに心なごみし賀状かな

竹崎 光子

(評)年賀状はパソコン作成のものや、印刷のものが多く、手書きのものは少なくなりしました。やはり、手書きのものは、心をゆさぶられます。印刷されたものでも、短くても添え書きがありますと、心に残ります。この作者の気持ちは、誰にも共感

できるものです。

良い句と言われる要素は、わかり易い。

共感できる。批評しやすい。ですが、この句にはそれがあります。

七種や段差かぞえる脚さばき

弘瀬うき子

(評)ご存じのように、うき子さんは、包女さんとともに、ご高齢ですが俳句・短歌に、ご練達で高知新聞の俳壇・歌壇に度々掲載されています。この句は、七種粥を食べ、家族揃って氏神様へ、お参りしたときに、作句されたものでしょうか。段を数えて登るのはふらついたり、脚をとめたりしないことで、まだまだお元気な様子が、拝察されます。何時までもお元気で。

一湾の視野も肴に節料理

友草 水月

(評)今年の初句会を浦戸湾岸の料亭で、実施されたときの、句と聞きました。句会の後の、宴会では新春の、お節料理のご馳走でしたが、青い空、輝く海、青松・白砂の海岸など一望出来る、美しい景色を堪能しながらの宴会、羨ましい限りです。

「一湾の視野も肴に」とは言いえて妙で、

流石にベテランの句。

初鏡やさしき嘘をつきにけり 植田 紀子

流れ去る刻の余情や除夜の鐘 大川 節弥

着ぶくれて明日は忘れる今日の事 岡本とも子

古株も新しき顔して雑煮食い 秋田 律子

人生に三寒のあり四温あり 刈谷 志津

目出度さよ大きくVの賀状かな 津田 久美

定年後十年ぶりの賀状かな 森岡 照月

大年の生家にくつろぐ大胡座 松尾万津於

午後に着く孫待つ蒲団干しにけり 間 信子

行く年を名残りて拝む初日の出 中野 好子

初鏡亡き母に似て懐かしや 筒井 文

古曆捲り今年のレール敷く 川村 博子

茹干し芋焼きつつ食みて窓の猫 片岡 包女

駆けてきて幼な言葉の息白し 筒井 一平

泳いで飛ぶ鴨にある上手下手 間 浩太

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のことも川柳

地図の世界をにひろがるファンタジー

川内小3年 片岡 修斗

ひじちゃん天国行っても元気でね

川内小3年 竹倉 秀太

公園できれいな空気しあわた

川内小3年 楠瀬 好実

風がふき落ち葉がおよぐ 秋の空

川内小3年 辻 航希

サンタさん 本当にいるのか分からない

下八川小4年 宗我部浩大

日本の経済これからどうするの

下八川小5年 甲藤 綾香

サンタさん 今年は何をくれるかな

下八川小5年 曾我明日香

めざましがおきろおきろとベルならす

神谷小5年 坂本 志織